ふるさと—徳島へ

新　井　桂　子

竹下内閣が誕生した際掲げられた理念に「ふるさと創生」があった。新しい年が明けてから，この実現のために打ち出された「ふるさと１億円」（'89.1.4付朝日新聞による）に関する記事が，時折新聞の紙面を飾っている。これは，全国の各市町村に一律１億円，各都道府県に平均１億円を配分するというもので，全体では約3,300億円ものお金がばらまかれることになるという。ここで目標とされている「ふるさと」とはどういうものだろう。近年東京への機能集中が著しく，相対的に地方の比重は低下している。それによる歪みを是正し，各人が自分の生まれた土地で働く，あるいはそこから通える範囲で仕事ができる職住近接型の国土を実現し，ゆとりをもって生活できる空間を創成することが目標とされているのではないだろうか。

わが「ふるさと」徳島市は吉野川下流の沖積平野に位置し，16世紀末現在市内に城山として残る場所に蜂須賀家政が城を築き，それまで「渭の津」と呼ばれていたこの一帯を「徳島」と改めて以後，阿波国そして徳島県の中心として現在に至っている。「徳島」と聞くと，ほとんどの人が連想される「阿波踊り」は，蜂須賀公による徳島城の築城を祝して踊ったのが始まりであるという。明治22年（1889）には市制が施行され，今年は市制施行100周年を迎える。

明治以後の徳島市の変化は，その人口規模に端的に表れているようだ。明治22年に市となったのは全国で39都市あり，うち32が県庁所在地であったが，徳島市の当時の人口は６万892人，全国10位の規模を有していた。これは，阿波藩による江戸時代の塩・藍・葉たばこを始めとする産業の保護・育成の結果，徳島が特に藍の集散地として明治時代半ばのこの時期も勢力を保持していたことを反映している。

しかし，明治36年（1903）をピークに，インド藍、ドイツ製の化学染料の輸入により藍の生産が衰退の一途を辿ることになる。藍によって蓄積されていたはずの資本も，新しい産業を育成し，新たな発展をもたらすことができないままに，第二次世界大戦では旧市街の62％が焼失し，終戦を迎えた。

戦後は，周辺町村を合併することにより徐々に市域が拡大し，25万7884人という徳島市の人口は昭和60年現在83万4889人となった全県人口の31％を占めており，県内でもより都市的な徳島市への人口集中の傾向が現れてはいる。しかし，四国４県の他の県庁所在地が昭和60年にはすべて人口30万人以上，松山市にいたっては42万人余に達していることに比べると，停滞していると言わざるをえない。

このように徳島市の発展を阻んできた原因の一つには本州と海をもって隔てられていることがあげられる。その不利を克服し，四国４県の中では京阪神に最も近いという地理的条件を生かすことのできるのは明石海峡大橋の開通であろう。様々な情報手段が発達しつつある現在でも，一本の道で結ばれているという物理的・心理的効果は大きい。

本四架橋の一つである「神戸ー鳴門」ルートのうち，淡路島と徳島県鳴門市を結ぶ大鳴門橋は昭和60年６月に開通した。初年度にここを通過した車両は予想を20％上回る282万台にのぼり，駐車禁止のはずの橋上で眼下に広がる鳴門海峡やうず潮の景観を楽しむ人の姿も多く見られた。しかし，神戸からフェリーを使い，高速道路，橋を経由するとわずか３時間の距離である。橋の取り付け口となった鳴門市は立ち寄る観光客も増加したが，徳島市は通過地点となり，市内を通過する車両が増加したことによって交通混雑が激しくなるというマイナスの効果も現れている。

淡路島と繋がっただけでは，観光客は訪れても企業はやってこないということかもしれない。また，訪れた観光客に足を止めて見たいと思わせるだけのものがないということでもあるだろう。よく言われていることだが，1998年の明石海峡大橋の開通に向けて，ハードだけでなくソフトの面も充実されることを望みたい。